

最大の壁であったシュラウド家の問題は、一旦なんとか片付いた。所長代理、そして次期所長としての仕事は残っているけれど、それもどうにかなるだろう。アーシェングロット家への挨拶も、どうにかこうにかつつがなく終えた。

これで完璧。晴れて結婚。

——そう思っていた。

「……ナンテ？」

「だから、エタニティフロートです。人間と結婚する人魚のための風習で、小さなボートに乗って湖を周遊するんです。……そのボートを転覆させようとする有象無象の引き起こす試練に屈せず、愛を誓う、という」

「……………で、それをやるって？ 君が？ 君ってそういうタイプだっけ？」

「この際、僕の趣味嗜好は関係ありません。……リーチ家の希望です」

「……は？」

飛び出してきた意外な名前に、イデアはぱちぱちと瞬いた。リーチけ。……リーチ家？

リーチと言えばあれのことだ。アズールのそばにいつもべたりと引っ付いている凶悪な双子の兄弟。その正体はウツボの人魚である。

「言い伝えて、ボートを転覆させたのは二匹のウツボです。エタニティフロートの舞台である群青の街でウツボは縁起のいい生き物として扱われています。そして、僕は人魚で、人間と結婚する。……どういうことか、わかるでしょう」

「つまり」

イデアは激しく痛むこめかみをぐつと押さえて息を吐いた。

「人間と結婚する人魚であるところの君を祝うのに、ウツボによるボート転覆は必要不可欠だと」

「そういうことです」

アズールが語ったところによれば、エタニティフロートは群青の街でも一番華やかなセレモニーらしい。そもそも陸に上がる人魚が多くなく、その中で陸に残って人間と結婚する人魚はさらに貴重だ。人魚を育てる街として誇りをもっている群青の街としては、陸で恋を叶えた人魚を街を上げて祝いたい。つまり、エタニティフロートには多くの人が押しかけて、花婿と花嫁はさながら見世物のようになるという。

イデアは唸った。ぐりぐりとこめかみを押さえる。

知らん人に囲まれてボートを漕がされ、挙句あの子に転覆させられる？

ずぶ濡れになって、挙句足でも攣って溺れてみる。めでたいどころかい笑いものだ。ママー、あの人の髪の毛って燃えてるのに水に濡れても消えないの？ しつ、目を合わせちゃいけません。

冗談じゃない。

「やめよう」

イデアは最も合理的な結論をはじき出した。

「結婚、やめよう。入籍しない。一緒に住むのは予定通り。つまり事実婚ってことでどう？」

イデアのクソみたいな提案に、アズールは意外にも平然と頷いた。そうですね、と一言だけ言って、そうしてこの話はおしまいになった。この話というのは、イデアとアズールの結婚にまつわるすべての話である。

別に、結婚なんて書類上だけの話だ。イデアはアズールを愛しているし、アズールもきつとイデアを愛してくれているだろう。愛し合う二人が一つ屋根の下で暮らしている。その二人が法律的に、公的に、婚姻関係にあるかどうかなんて些末な話だ。

結婚しないことにした、と家族に話したときだけが少し大変だった。母は大いに嘆き、父は頭を抱え、そしてオルトは盛大に怒った。「そんなこと言って、アズール・アーシェングロットさんに逃げられても知らないよ！」というわけだ。

そんなことあるわけがない、というのがアイデアの出した結論だった。

アイデアはアズールを愛しているし、アズールもアイデアを愛してくれている。結婚なんてしなくたってそれは別に変らない。そもそも逃げられるというのなら、結婚していたって同じことだ。アズールのことから、婚姻関係があらうとなかろうと別れると決意したら最後、何らかの契約不履行の理由をアイデアに付きつけて颯爽と出て行ってしまおう。

この想像は、アイデアの中にあまりにも鮮明に浮かんだったので、アイデアは一旦考えるのをやめることにした。

アズールの家族へはアズールが説明するという。実家の猛反対にあったアイデアは恐る恐るアズールに「どうだった……？」と聞いたけれど、アズールはあっさり「特になにも？理解してもらいましたよ」と言うだけだった。

アイデアは胸を撫でおろした。そんな不誠実なことではうちの子を陸の男には渡せない、などと言われたらどうしようかと心配していたのだ。

けれどまあ、アズールも立派な成人男性である。アイデアが弱いアズールを養ってやるわけでも、子どもができてしまったわけでもない。陸で生きるのはアズール自身が、自分のために決めたことだ。

「これで問題はすべて解決。アズール氏、幸せになろうね」

愛しい恋人の髪にアイデアはそつと唇を落とす。くすぐったそうにアズールは笑って、「僕はもう、とつくに幸せですけどね」

などと可愛いことを言うので、アイデアはもうめろめろになってしまった。

問題が起こったのは、アイデアがアズールとの新居に移り住んで、二カ月経った頃のことである。

結婚していれば新婚真っ只中だ。家は購入したての新築マンションだし、寝室はひとつで、二人で眠るためのキングサイズのベッドが鎮座している。

アイデアは浮かっていた。他人と一緒に暮らすなんてまっぴらごめんだと昔は思っていたけれど、相手がアズールであれば話は別なんだと実感していた。好きな子をおはようからおやすみまで毎日見守れるなんて控えめに言って天国だ。

浮かれた気持ちが作用して、イデアにしては珍しく朝アズールと同じ時間に起きて、フルーツやミルクといった栄養価の高い朝食を摂ったり、休日の夜はキッチンで並んで料理をしたりもした。オルトが知ったら涙を流して喜んだだろう。

イデアの作ったお掃除ロボットも極めて優秀に進化しており、イデアの苦手な整理整頓といった分野をフルカバーしてくれている。

何もかもがうまくいっている。結婚って、最高かも。イデアがそう噛み締めた矢先のことだった。

「……何これ？」

「何がですか？ ……ああ、釣書です」

ネクタイを緩めながらアズールはイデアの手元を覗き込んだ。リビングのローテーブルにアズールが無造作に置かれていたそれだ。持ち主であるアズールは凝り固まった肩をぐるりと回す。バキボキと人体からしてはいけないような音が響く。

「釣書……？」

「取引先の姪御さんだそうです」

「いや、……え？」

開いたそれは、確かに釣書だった。つまりはお見合いのための履歴書だ。淡いグリーンのドレスを着た楚々とした女性が写真には写っていた。茶色い髪を柔らかく結い上げている。目を見張るほどの美人とはいえないが、素朴で愛嬌のある顔立ちである。

「……え、君宛の？」

「当たり前でしょう」

「……え、何で？」

理解が追いつかず間の抜けた問いを重ねるアイデアに、アズールは呆れたように溜息をついた。

「身近にいる独身の若造なので、都合がいいんでしょう。うちの娘はどうだとか言われることは今までもありましたけど、さすがにこうして形にされるとね。きちんとしたお断りを用意しなくては」

アイデアはまたいた。アズールはそんなアイデアを置いて、着替えのためにと自室へ引込んでしまう。ソファの背もたれに置き忘れられたネイビーのネクタイと釣書の写真を、アイデアは交互に見比べた。

「……マ？」

あまりに愚かなその言葉は、幸いアズールの耳には届かなかった。

アイデアにとっての重大事件はこれだけで終わらなかった。

「ど、どどどどうしたの!？」

足を引きずって帰ってきたアズールにアイデアは仰天した。アズールはリビングへ顔を出したアイデアを一瞥したあと、億劫そうにソファへ座る。隣に座ったアイデアはアズールの顔を覗き込んだ。呼気からただようアルコールの匂い。酔っているのだ。悪いことに、アズールは飲んでも顔に出ないタイプだった。せめてわかりやすく顔が赤くなれば周囲も気遣ってくれだろうに。

「足、どうしたの」

「少し、痛めました」

「何で？ 今日、パーティーだったんでしょ？」

何とかと言う取引先が主催のパーティーだと、めかしこんで出かけていったはずだ。足を酷使するほどの乱闘騒ぎでもあったのだろうか。それにしてはきれいに整えられた銀の髪に乱れはないが、しかしアズールであれば髪の一筋も乱さずに狼藉者を伸ばしてしまうことも簡単のような気もするし……。想像を膨らますアイデアの横で、アズールはばさりとジャケットを脱いだ。皺になるのも構わず床へ投げ捨てる。

「ダンスパーティーだったんですよ。入れ替わり立ち代わり、お嬢さん方の相手を務めさせられてこのザマです」

吐き捨てるように言って、アズールはベルトを外しスラックスを脱いだ。ジャケットと同じようにそれを床に捨て、ネクタイも放り投げて、シャツとボクサーパンツと靴下だけの姿になったアズールはそのまま隣に座るイデアに擦り寄ってくる。甘やかすように腕を広げてやれば、容赦なく乗り上げて来てイデアの鳩尾にわずかなダメージが通った。

痛む鳩尾に息をつめながら、なるほど、とイデアは内心頷いた。

アズールは、人魚であるということを公表していない。陸に上がった人魚という物珍しさで得られるメリットと、いまだ一部に根強く残る差別的な視線のデメリットを天秤にかけ、公表しないことを選んだのだ。

だから、器用に動くこの足が、魔法で作られたものだ知っている人は限られている。

むき出しになった足を癒すように撫でれば、アズールが甘えるようにイデアの頬に唇を落とした。

アルコールの匂いに混ざって香る、きつい女性物の香水の香りに、イデアは顔を顰める。

「ちよつと飲みすぎでは」

「だって、断れません」

唇を尖らせたアズールは、そのままアイデアの口に吸い付くようにキスをしてくる。ちゅ、ちゅ、と繰り返されるそれを受けながら、アイデアは眉根を寄せた。

酔ったアズールは、キス魔なのだ。いつも以上に甘えてくるし、いつも以上にアイデアに触れていたがるし、いつも以上にキスをしてくる。まさか他の相手にもこうではないと思うけれど、とはいえアルコールの酩酊作用は侮れない。

注がれる酒も誘われるダンスの相手も断ることは許されないまま、それでもきつと笑顔を絶やさず最後まで付き合ったのだろうアズールが、心配と言えば心配で、腹立たしいと言えば腹立たしかった。

キスに満足したのか、そのままアイデアの上でうとうと眠りに落ちそうになるアズールをアイデアは何とか揺り起こし、シャワーを浴びさせた。寝間着に着替えさせてベッドに押し込む。

「いであさん」

つたない声で名前を呼んで、アイデアの髪を緩く握ったまま眠りに落ちたアズールに、アイデアは深い溜息を吐いた。

今までも、取引先やらなにやらの会食だのパーティーだのに出ていることは話に聞いて知っていたけれど、ああまで無理しているとは思わなかった。目の当たりにすれば、どうしたって心配になる。なるべくそういう酒席は控えるように進言するべきだろうか、いやでもそれって口を出しすぎかも……アズールもいい大人なんだし、それにこれはアズールの仕事の領分だし、とアイデアの迷いをよそにアズールは「来週末は遅くなります。パーティーで」と言い出した。

「またパーティー……？ そんなにパーティーって常時開催されてるもんなの？」

「今回はジョンソン・ケリー氏の後援パーティーなんです。ケリー氏ご本人ももちろんこられますし、政界に顔のきく方も多数出席予定ですから、前回のものとはわけが違いますよ」

嬉しそうにアズールは言った。ジョンソン・ケリーといえば最近名の知れた政治家で、国内のみならず国外へのパイプも太いことで有名だ。その後援会ともなれば、確かに政治家や、あるいは同等レベルの人物が集まる会になるだろう。食欲なアズールのことだからそこで人脈を広げ、自分の名前を上げたいと思っているのは明白だった。

しかしアイデアは、それどころではない。

アズールの仕事を邪魔したくないが、かといってそんなパーティーに平然と送り出すこともできなかった。政治家や政界というのは実にきな臭く、表向きは健全な集まりでも裏では賭博や違法ドラッグのお楽しみがあるなんてことは珍しくもない。ダンスひとつ断れないア

ズールがそんなところへ声をかけられでもしてみろ。得られるメリットと起るデメリットを天秤にかけ、メリットが上回ると判断したが最後、付いていくに違いなかった。イデアはアズールの判断力がほとんど損得勘定に全振りしていることを信じていたし、アズールの遵法精神を信じていない。

結局、イデアはアズールに黙ってパーティーに付いていくことにした。

権力とは、こういうときのためにあるのだ。

「もしもし、父さん？　来週末にさ、こっちでパーティーに参加する予定があったりしない？」

所長代理というのは所長の仕事を代行する立場であって、所長が招待されたパーティーに代理出席するのも仕事のうちだ。もちろんこんなのは詭弁だった。招待をした側はダメ元で招待したのであろうし、現所長としても当然断るつもりだったからだ。

でもまあ、代理が自主的に代理出席を買って出ても、別に悪いことではないはずだ。

脳内で言い訳を並べたてながら、イデアはワイングラスを傾けた。血の色に似たワインを青い唇へ流し込みながら、パーティー会場の反対側を盗み見る。

アズールは爆モテしていた。

そりやそうだろう。新進気鋭の若手社長、その上顔も良いときている。出席者の顔ぶれを考えればただの飲食店経営者という肩書こそ弱くはあるが、大仰な肩書がない分かえって手が届きやすいともいえるだろう。

特に、華やぎとして連れてこられたのであろう若い女性に囲まれて、アズールはにこにことしていた。如才なく、というのが正しい。隙を見せないその笑みは、イデアからすれば作り笑い乙くらいのものだが、若いお嬢さん方にそんなことがわかるわけもない。

そのうち一人のグラスが空になっっているのに気付いて、アズールは給仕を呼び止めた。頼んだのはおそらくアルコール度数の低いカクテルだ。礼を言う女性にアズールは片目をつぶって見せる。「あまり酔っては、あなたの素敵な恋人がきつと心配するでしょうから」

きやあ、と女性たちの声。あなたに恋人になつてほしいわ、という言葉。

イデアはげんなりとして思わず天井を見上げた。ご精が出ることで。

広い会場の反対側にいるイデアがどうしてつぶさにその会話を確認できるかといえば、手のひらの上にある小さな魔法陣の力である。

呼び出した使い魔は蛙の姿で、アズールの近くの壁に張り付いている。蛙の拾った音が魔法陣を中継して、イデアの脳裏に響く仕掛けだ。ナイトレイブンカレッジでは一年生で習う初歩的な魔法である。

うんざりしながら様子を観察していれば、アズールを取り囲んでいた女性たちが、誰かを見止めて一礼し、その場を離れていった。入れ替わるように恰幅のいい男性が、小柄な女性を連れてアズールのところへやって来る。アズールの応答を聞くに、そこそ有名な企業の役員のようなだった。

男の話す会話は実につまらなかった。

アズールが今の今まで女性にモテていたことに触れ、それからアズールの功績をたたえる。褒めながら、「その年齢にしては」と釘を刺すことも忘れない。

「しかし、君のような仕事ぶりでは、毎日の生活も大変だろう。結婚する気はないのかね」聞こえたその言葉に、イデアは思わず息を飲んだ。

アズールはなんと答えるのだろう。緊張して続きの言葉を待つイデアに、アズールの明るくはつらつとした声が聞こえる。

「毎日忙しいものですから、あいにく出会いもありません。それに朝も夜もない生活ですから、付き合わされる方が気の毒だと感じてしまつて……どうにも気が向きません」

「いやいや、アーシェングロットくん。朝も夜もない生活をしているからこそ、支える人が必要だ。帰ればあたたかい部屋で、あたたかい食事が待っているというのは、仕事をうまく回していくうえでも大切なことだよ」

前時代的なことを言つて男は、連れていた小柄な女性の背中を押した。

「どうだね、うちの娘は。親が言うのもなんだがよく気が利くいい子だ。君の助けにもなれると思うがね」

小柄な女性は恥ずかしそうにアズールを上目遣いに見上げている。

アズールが答えるより前に、イデアは使い魔を回収した。

魔法陣を打ち消して、グラスワインの残りを煽る。

アズールは、何と答えたのだろう。

空になったグラスを通りかかった給仕に渡し、イデアはバルコニーへと出た。薄らと火照った顔に夜風が気持ちいい。

本当はあの場に割り込んで、アズールと付き合っているのは自分だと言ってしまったかった。けれど、アズールのことを考えるとそれはできない。ああいう人脈を得るためにアズールはこういう場に顔を出しているのだ。

どのくらい時間が経っただろう。悶々としながら手すりに身体を預け外を眺めているイデアの背に、「イデアさん」と声がかかった。

振り向かなくてもわかる。この会場にいる誰よりも、イデアが一番知っている声。

「……バレてたの」

「名簿を見ました。挨拶する順番を考えようと思ったのに、あなたがいて目を疑いましたよ」

「それで、僕への挨拶は何番目になったの？」

「何言ってるんですか。一番最後に決まっているでしょう」

イデアと同じように手すりに肘をついたアズールが、呆れたように笑った。涼やかな風が吹いて、夜に映えるアズールの銀色の髪を揺らす。心地よさそうに目を閉じるアズールの横顔をイデアは見つめた。

恋人がいますって、どうして言わないの。

湧き上がったその言葉を、イデアは飲み込んだ。

恋人の有無なんて、ああいう人間にとっては何の意味もないことだということを、イデアはよく知っている。大事なものは、家と家の繋がり、婚姻という関係そのものだ。

「何で蛙なんですか？」

「それもバレてたんだ……特に意味はないよ。小さくて、一番呼び出しやすかっただけ」

「なんだ。あの蛙でお嬢さん方のドレスに張り付いて、脅かすつもりかと思っていました」

「そんなことしないよ」

「そうなんですか？ 意外です」

「意外って何。これでも君の仕事については尊重してるつもりなんだけど」

そうでなければこのパーティーにそもそも出席できないように、閉じ込めてしまったってよかった。

昏い想像を思い浮かべながら目を伏せたアイデアの顔を、アズールが楽しそうに覗き込む。

「そんな顔で？」

「……どんな顔」

「嫉妬しています、つていう、顔」

小さく笑ったアズールの手がするりとアイデアの頬へ伸びる。向かい合わせになった両頬をそのままアズールに掴まれて、アイデアの唇にアズールの唇が重なった。

ちゅ、と音を立てて離れていく艶めく唇を、アイデアは茫然と見つめる。

「……誰かに見られたらどうするの」

「誰も見てませんよ」

近くで囁くアズールからは、やはり女物の香水の匂いがする。べたべたと甘たるい、アズールには似合わない香り。

「ねえ」

「はい」

「……僕の造ったお掃除ロボットも、料理マシンも、君の仕事を支えるには十分だと思うんだよね」

「そうですね」

「君が疲れて帰ってきたときも、僕なら君をバスルームに連れて行って、ベッドまで運んであげることができる」

「ええ」

「……アズール氏」

「はい」

「……結婚、しようか」

アイデアの言葉に、アズールが目を細めた。会場から零れる照明を受けて、スカイブルーがきらきらときらめいている。

「いいんですか？ エタニティフロートは避けられませんかよ」

楽しそうな声だった。まるで、アイデアがいずれこの選択をすることなんてとくにお見通しだったような、そんな。

「……転覆しないように、ボートに改造を施すのはレギュレーション違反？」

「確認したことはありませんが、ボートは町で決まったものを用意するので、難しいかもしれませんね」

「魔法で防壁をはるのは？」

「そのくらいなら大丈夫じゃないですか？ それでもあいつらは諦めないと思いますけど」
うう、と小さく唸るアイデアの髪を、アズールの指が耳にかける。

「大丈夫。落ちて溺れても、僕が助けてあげますよ」

イデアの人魚はそういつて、嬉しそうに笑った。

その年のエタニティフロートの盛り上がりぶりといったら、その後もしばらく群青の街で語り継がれたほだった。

由緒正しく二人のウツボの人魚が揃うだけでもひどくめでたいのに、普通はボートの転覆を狙って水面を激しく揺らしたり風を吹かせたり、船を掴んだりするだけのはずなのに、その時は魔法合戦と見紛うほどの激しい魔法が繰り広げられた。二人のウツボは容赦なくボートに向かって魔法を放つし、ボートの上の花婿二人がこれまた見事に応戦したのである。

いつしか見守る観客たちは、ウツボ派と花婿派にわかれて、轟員の陣営を陸から応援する始末。

その中でも特に圧巻だったのは終盤、いよいよボートが無事に一周し、陸に付こうかと言うときだった。水底に姿を沈めた二匹のウツボがボートをそっくり押し上げて、ひっくり返してしまったのだ。二人の花婿は湖に落ち、しばらくの間姿を見せない。もしや溺れてしまったのかと思ったそのとき、優美な蛸の足が水面から飛び出した。それに次いで現れたの

は、海の魔女と見まごう灰色の肌をした蛸の人魚の花婿と、濡れても消えない不思議な炎のようなきらめく髪を持つ花婿、二人の美しい姿。

わあっと観客は歓声をあげ、それに応えるように蛸の足がゆらゆらと揺らめいた。

その後ろで、二人のウツボがおかしそうに笑っている。

そうして蛸の人魚の花婿は一度とぷんと水の中に消えてからもう一度礼服をまとった人の姿になって、人間の花婿と二人仲良く手を繋いで陸へ戻ってきたので、観客は再び大歓声をあげたのだった。

歓声をあげる人々の中、大人に止められるのも聞かず、湖ぎりぎり水中を覗き込んでいた少女がいる。興奮に赤くなった顔で彼女は母親の服の裾を懸命に引いた。

「ねえ、ママ！ にんぎょひめのおにちゃん、みずのなかで、おむこさんとキスしてたんだよ。すつごくすつごくきれいだったの！」

けれど大人たちは水に濡れた花婿たちに拍手を送るのに夢中だったのでその言葉はほとんどの人には届かないまま。少女もいつしかあれは夢だったのかしらと忘れてしまったので、湖の中で交わした誓いのキスは、無事に二人の秘密となった。